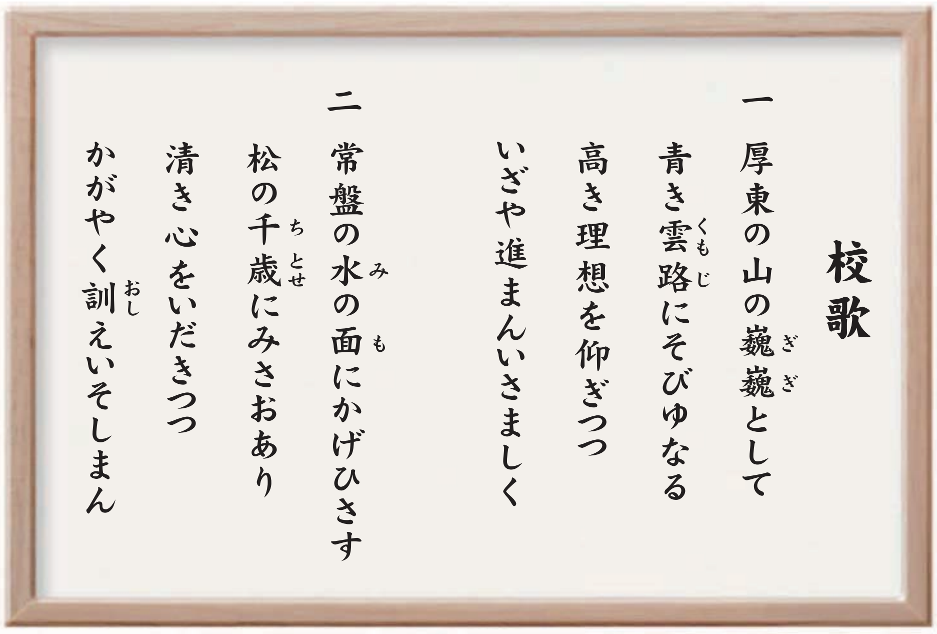
宇部日報　2022年〈令和4年〉10月6日 木曜日

創刊110周年記念

誇れるふるさと 24地区リレー〈vol.10〉

＜神原③ 小学校歌＞

来年度に100周年を迎える神原小（松坂等校長）。1923（大正12）年4月の開校時に制定された校歌には、郷土の自然と共に子どもたちの純粋な精神が描かれ、神原の校風を象徴するものとして現在まで歌い継がれている。


校歌

一 厚東の山の巍巍（ぎぎ）として
青き雲路（くもじ）にそびゆなる
高き理想を仰ぎつつ
いざや進まんいさましく

二 常盤の水（み）の面（も）にかげひさす
松の千歳（ちとせ）にみさおあり
清き心をいだきつつ
かがやく訓（おし）えいそしまん

初代校長の方針「児童への尊敬」宿す

校風を象徴、賛美歌のメロディー

1920年ごろ、炭鉱をはじめとする産業の伸展に伴い新川市街地で児童が激増したため、学校増設が決まり、新川小の児童の一部を移す形で同校が誕生した。50年代に入り、さらに増えた児童を分離するため琴芝小が開校。当時の神原校区のうち塩田川を境にして山手側が琴芝校区になるなど、開校以来幾度も行われた複雑な校区改編の歴史があり、地区外に小学校があるという現在の特殊な形が出来上がった。

校歌は、山本寛助初代校長が「教育の秘訣（ひけつ）は児童を尊敬すること」という考えに基づいて書いた詞に、当時の先生たちが賛美歌のメロディーを組み合わせて作られた。現在は2番までしか残っていないが、戦前は4番まであったという。

雄大で厳かなさまを表す「巍巍（ぎぎ）」など、小学生が歌うには難しい言葉も使われているが、松坂校長は「厚東の山」のように堂々と、「水面に映る松」のように揺るがない清い心を持ち続けるなど、詞に込められた思いを今の児童に伝えている。赴任して3年、新型コロナの影響で歌う機会は少ないが「6年間歌い続けることで記憶に刻まれ、血となり肉となる。『高き理想を仰ぎつついざや進まんいさましく』の詞の通り、夢に向かって一生懸命にチャレンジする心を培ってほしい」と願っている。

現在の校章のモチーフは桜のつぼみ。おしべとめしべは児童、緑はそれを支える教師や保護者を象徴する。あえて咲き姿にはせず、これからの子どもたちの可能性を表現している。同校では、来年の100周年に向けて「地域と共に」を合言葉に準備中。松坂校長は「100周年は、神原を支える地域の人々とのつながりを見詰め直す良い契機。神原っ子たちが、地区の良いところを受け継ぎ育んでいけるような一年にしたい」と話した。

現在の校章（左）と戦前の校章